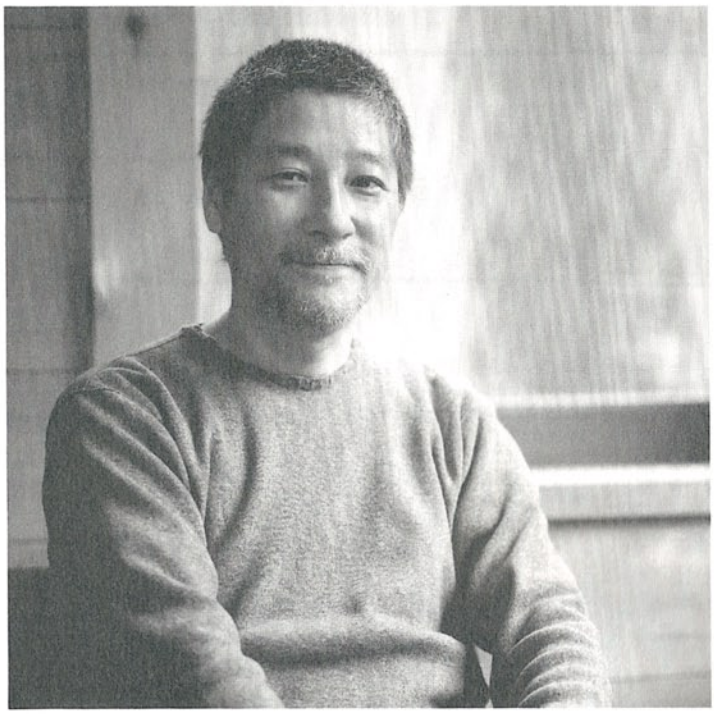
塗師

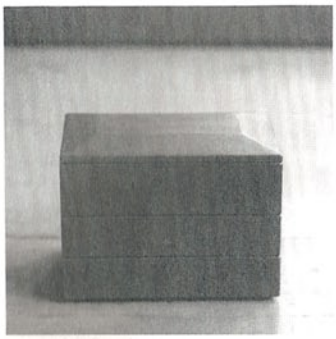
赤木明登さん

普段使いの漆の器「塗り物」が人気の赤木さん。いつもにぎやかな能登のご自宅を訪ねました。

撮影／柳原久子　取材・文／大平一枝



子ども椀。動物の絵柄が5組そろう。大人になっても使える洗練された図柄が好評



姫重。小ぶりな長方形の重箱はお弁当にもてなしにも両方大活躍。大ぶりサイズも

「これでいい」のない漆器の世界

「いま、地元のお風呂に行ってきたんですよ」と、お昼前、湯上がりのつやつやした笑顔で現れた赤木明登さん。個展続きで少々疲れていた体を、近所にある温泉で癒やしてきたとか。赤木さんが22年暮らす能登は、雪が深く、寒さの厳しい地ですが、車で走ると小さな温泉が点在し、こんなふうに、昼間からさっとつかることもしばしば。自宅兼工房ではお弟子さんを6人抱え、制作のほか、個展で全国を飛びまわらなければならない赤木さんにとって、近所の温泉は格好の気分転換なのかもしれません。

編集者から転身、輪島塗を学ぶため東京から能登へ22年前に家族で移住。弟子修業時代を経て、いまは弟子を抱える立場ですが、人を養う大変さはどれほどなのでしょう。

「手取り足取りは教えないんですよ。僕の仕事を見る。それが弟子の仕事。僕もそうだったのだけれど、滅私奉公で、常に親方が何をしたいかだけを考える。そして軍事訓練のように毎日、同じものをつくる。自分を消し去ることで見えてくる自由ってあるんですよ。技術を身につけることで得られる自由というのが。だから若い子たちといるのは面白い。むしろ、彼らから学ぶことも多いです。塗り物に終わりなどない、僕もまだまだ足りないことだらけですから」

漆器、とりわけ輪島塗というと、高価で扱いが大変な敷居の高い器というイメージがありますが、赤木さんは5年の修業ののち、独立してからは輪島塗下地の上に和紙を貼った独自の技法を考案したり、子ども用の器をつくったり、一貫して普段使いの漆器を制作。〝毎日使いたくなる漆器〟は、早くから注目を浴びてきました。発想の原点は毎日の料理や暮らしのなかから生まれます。

「みんなでわいわい食べたり飲んだりするのが好き。いまなら魚を盛る器をつくりたいですね。四角くて刺し身も盛れる塗り物って、ありそうでないでしょ？」

少年のように目を輝かせて楽しそうに語る赤木さんの、この自由でしなやかな想像力。厳しい徒弟制度のなかで自分を消し去り技術を学んだ6年間があるからこそ、いま、自分の内側から生まれる自由を楽しめるのだと、その穏やかな横顔が語っています。けっして平坦ではなかったにちがいない22年間を支えたのは、奥さまの智子さん。ギャラリー勤めを辞め、乳児を抱えながら東京から明登さんについていった明るい彼女の人柄にも助けられたと赤木さんはいいます。

東京での日々は楽しいけれど、そこに暮らしがないと思った

東京で女性雑誌の編集をしていた明登さんは、塗師（ぬし）になるため、27歳で縁もゆかりもなかった能登へ。乳飲み子を抱えての家族の移住だったけれど、迷いはなかったと振り返ります。

「編集者の4年間は忙しくて、毎日、タクシーに乗って、いろんな人と会い、何でも手に入る楽しい生活。でも、そこに暮らしがなかった。ごはん、掃除、洗濯、家族との語らい。東京にいると、それがない。このままじゃだめだな、っていうあせりがどこかにずっとあった気がします」

27歳の弟子入りは、人より10年遅いといわれています。そのため赤木さんは、人の3倍努力しなくては、と朝起きた瞬間から夜寝る寸前まで、塗りつづけたそう。

「お金もないから寺の家を借りたり、畑をつくったり。でも、つらいとかはまったくなくて、妻とそういう状況を楽しめたんですよね。といっても僕は寝ても覚めても漆のことばかりで、畑は彼女がやってくれましたが」

かつて暮らしがないといった赤木さんの今日という人生に、求めていたものは見つかったのか……。それは、あえて聞かなくても、言葉の端々から伝わってきます。

「4時に目覚めてしまうんです。朝の光がすごくきれいで寝ているのがもったいなくて。夜が明ける瞬間、鳥が一斉に鳴きだします。そんな夜明け前から少しずつ変わっていく山を見るのが一番好きです」

能登に流れる豊かな時間のなかで、美しく使いやすい赤木さんの器は、今日もつくりつづけられています。

あかぎ・あきと　塗師。1962年、岡山県生まれ。編集者を経て、'88年に妻・智子さん、長女・百ちゃんとともに輪島へ。輪島塗の修業を経て'94年に独立。ドイツ国立美術館「日本の現代塗り物十二人」、東京国立近代美術館「うつわをみる 暮らしに息づく工芸」に選ばれる。著書に『漆 塗師物語』（文藝春秋）など。1男2女の父。

イラスト／東 ちなつ